様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ４ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０２７

研究課題名（和文）教師の熟達とキャリア形成に関する日独比較研究　―教師力としての教育的タクトを軸に

研究課題名（英文）Comparative Study on School Teachers Mastery Process between Germany and Japan - From the viewpoint of pedagogical tact as practical judgement

研究代表者
鈴木　晶子（Suzuki, Shoko）

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：１０２３１３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師の熟達とキャリア形成過程について、教師力としての教育的タクトに注目し、日本とドイツの学校を歴史人類学的方法で比較研究したものである。教職の熟達過程において、授業実践、生徒指導、学級経営それぞれで働く教育的タクトは、決して独立したものではなく、教育活動の基底において連携して働く関係にあることが、日独それぞれの学校での教育活動およびそれぞれの活動で必要とされる能力・技能の分析を通して明らかになった。教師力養成のためには、予測的感知を核とした経験把握の構造化に基づいたプログラムを編成することが肝要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This project offers a theoretical analysis of the school teacher’s mastery process from the viewpoint of pedagogical tact as practical judgement based on comparative survey using the historical anthropological method. The following was clarified through the analysis of functioning of tact; 1) The professional development process of teaching jobs, the educational tact worked in classroom practice, student guidance and classroom management are never independent, but also its function of each activities are in a relationship to work in cooperation on the basis of educational activities at schools. 2) In order to train teacher skills, it is essential to organize a training program based on the predictive sensing, that grasps the structure of experiences.

研究分野：教育学

キーワード：教育的タクト　教師力　熟達　経験　歴史人類学　パフォーマンス分析　キャリア形成　判断力

１．研究開始当初の背景

喫緊の教育課題への対処にあたって、組織ぐるみの対応が求められる現代、教師に必須の専門性や実践力の中身は変化してきている。また、教員の年齢構成の劇的変化を受けて、若手教師の系統的・継続的なキャリア形成方法も新たな課題を抱えている。しかし、授業実践、学級経営、生活指導などそれぞれに必要とされる能力や教育術について研究が個別に進められてきているだけで、教師の仕事全体に通底する教師力を教職熟達度の観点から、教師としてのキャリア形成過程全体を視野に入れ系統的に支援する体制は確立しているとはいえない。教師の熟達研究としては、実践経験の反省・分析に着目した Reflective Practice 研究がある（D.Schon 1983, S. Brookfield 1998, G. Bolton 2010）。また、歴史・文化人類学的手法で授業実践や教育活動における行為を演劇的行為やパフォーマンスと捉え、相互のやり取りや役割行動における言語や身体の多重的・複層的な意味を記号論的に分析する一連の研究がある(R.Winckel 2002, Ch.Wulf 2001/2007, E.Liebau 2005, J.Zirfas 2005/2013)。そのなかで教育的タクト(Herbart 1802/1806, Blochmann 1950, Muth 1962)は、実践の渦中において実践者が自己自身と距離を置いて観察する象徴的かつ役割演技的能力であり、また身体や感情を総合する行為能力や行為の術であるとして、再びその重要性見直されている。また、タクトは脳研究や心理学、音響学など隣接する人間諸科学でも関心が高まり共同研究が進んでいる（鈴木晶子 1990/2006/2010, Zirfas 2012)。以上成果を踏まえ、本研究ではタクトの観点から人類学的手法による教育実践のパフォーマンス分析を養成プログラムに組み込むことで、教師のヴィジョン形成や熟達度を調査し、教師力養成を調査・研究することとした。

２．研究の目的

本研究は教育活動一つ一つで必要とされる教師の教育術を連繋させて働く教師の専門性及び実践力（教師力と総称）について、教育的タクト（教育的判断力・教育術）を軸に、教師のキャリア形成の観点から、日独で人類学的手法による学校フィールド調査を実施し、教職熟達度を指標化することにより教師力養成プログラムを構築するものである。具体的には以下の３点に集約される。

１）日独それぞれの小学校の学校日常において教師が行う総ての教育活動を総覧し、授業実践、学級経営、生活指導などそれぞれの教育活動において必要とされる教師力を抽出し、教育活動と求められる教師力との相関マップを作成する。また、必要とされる教師力の抽出と系統化を行う。

２）様々な教育活動を構成している教師力の特質が、初任者から熟達者へと経験を積むなかでどのように変化していくかを明らかにすることにより、経験値を向上させていくメカニズムを解明する。教師自らがその教育活動の振り返りにおいて、経験した事柄から何に力点を置いて記憶し、経験の意味をそこに見出すかなど、経験知の蓄積と智恵の深まりの関係について、聞き取り調査、教師自らによるパフォーマンス分析を通して明らかにする。これにより、経験値向上に効果的な要因の特定と教職熟達度の指標化を行う。

３）自らの教育実践をどのように振り返り、どのような観点を設定し、経験を活かすかという、経験振り返りを通したパフォーマンス分析法を取り入れた、教師力養成プログラムの開発を行うことを目的とした。

３．研究の方法

歴史・文化人類学的手法でパフォーマンス分析やパフォーマティブ教授法の開発をこれまで行ってきた実績をもとに、日本とドイツそれぞれの学校でフィールド調査を実施し、それぞれの学校について教育活動総覧マップを作成し、求められる教師力の具体を分析する。また、教師自身に、自己の教育実践における行為を、象徴的・役割演技的な行為として捉え、認知、身体、感情、場の質的側面に着目して振り返る、パフォーマンス分析の方法を、ワークショップや討議を通して体験してもらう。新任教師と熟達教師への聞き取り調査も併せて行い、教職熟達度を指標化し、教師力養成プログラムを開発するものである。具体的は以下の 3 項目からなる。

A.日独の学校における教育活動の企画運営など現状の把握

日本とドイツの小学校における教員の活動全体を時間の量および質の観点から把握し、教育活動の企画運営、推進状況を総覧し、日独比較を行う。

B.教職の経験値向上に係る効果的な要因の特定と教職熟達度の指標化

教育活動における自己のパフォーマンスについて、日本、ドイツそれぞれの学校で、初任者、中堅、管理職それぞれに一定期間実施してもらい、その記録をもとにケーススタディを討議形式で行う。それをもとに経験値向上に係る効果的な要因の特定と教職熟達度の指標化を行う。

C.教師力養成支援プログラムの開発

教育活動の総覧図と、教職熟達度を組み合せ、教師力熟達支援のプログラムを開発する。日独の教員グループによる分析結果を基に、自らの教育活動経験を反芻するための着眼点のマッピング、自己のパフォーマンス分析の作業を方法として確立することで、人類学的思考法のトレーニングを組み込んだ支援体制を構築し、教師のキャリア形成へのヴィジョンを支援する。

４．研究成果

(1)教育的タクトによる、重要な観点の抽出という働きは、自らの教育活動体験のパフォ

ーマンス分析と連動していることが、ビデオグラフィーおよび半構造化インタビュー、また、教師自身による教育活動の振り返り（言語化過程）を通して明らかになった。教師の判断や決断を司る教育的タクトは、単発的には、教育活動における個々の場面において、状況で求められる最も適切な行為を可能にする専門的な能力（智恵）となって発現する。その際、タクトは、それぞれの状況の背景にある様々な要素を取り出し、素早くその関連性を読み取るとともに、適切な対処法を決定する働きもしている。このような個々の判断や決断の形をとって現われるタクトは、授業実践、生徒指導など教育活動のあらゆる場面に関係している。個々の場面での判断や決断の観点は、自らの教育活動を振り返り、その自分の熟達にとっての意味を取り出してくる際に、重要な指標となってくることが、今回の調査研究で明らかになった。それは、目の前の状況を構成している様々な要素、例えば、年間計画のなかでの生徒集団が抱える現時点での課題や、個々の生徒の近況、発達や学習の度合い、保護者との関係の質、生徒間での理解の状況など、一つ一つの場面は、その奥に様々な教育的要素が織りなす網目の上に成り立っている。この網目を瞬時に見極める眼を育てていくためには、日ごろの教育活動への取り組みに際して、自らの振る舞いが生徒個々人や生徒集団、あるいは同僚、上司など職場の仲間に対してどのような印象を与えるメッセージを発しているかに対して、ある種の繊細なセンサーを磨いていかなければならない。それは自己の活動を相対化する眼をもつことでもある。この相対化のまなざしを、歴史・文化人類学では演技的行為ないしパフォーマンスと呼んでいる。自己の行為を相対的な観点で見つめるもう一つの眼によって、自らの行動のもつ象徴的ないし役割演技的意味に自覚的であることが可能となる。この捉え方を通して、自らの教育活動を振り返ることで、自らの活動体験のなかから熟達に重要な意味をもつ観点を取り出し、経験を意味づけ、自らの糧としていくのである。ドイツ・ケルン市のインクルーシブ教育実践校では、多様なニーズをもつ生徒集団への対応方法について、教育技術や教育方策として合理的にガイドラインとして示すことができる部分と、曖昧なままに見様見真似で伝承されていくべき部分とが教員間で整理されつつ、教員研修を通して常にその内容を活性化していく仕組みがとられていた。教育的タクトとして伝承されていくべき教師の資質について、日本の学校では、そのほとんどが教師一人ひとりの名人芸と位置づけられがちで、教育活動の質を上げていく試みが結果、業務に費やす時間の量的拡大に繋がっている傾向が明らかになった。教育活動における教育的タクトの働きを、不文律あるいは名人技として埋もれたままにするのではなく、伝承可能にする仕組み作りが重要である。

(2)教職の熟達過程において、授業実践、生徒指導、学級経営それぞれで働く教育的タクトは、決して独立したものではなく、教育活動の基底において連携して働く関係にあることが、日独それぞれの学校での教育活動およびそれぞれの活動で必要とされる能力・技能の分析を通して明らかになった。また、日々の学校日常における教育活動の経験は、さらに、教員相互の切磋琢磨を通して、また、管理職となってからは教員の適材適所への配置やコーチングなど、学校教師集団相互の磨き合いがうまく機能しているかどうかによって、より豊かなものとなっていく。その際、自らが教師としての熟達過程においてどの程度のところにいるか自覚的な教師ほど、自分の教育活動の強みと弱みとを常に把握しつつ、他の教師のパフォーマンスから多くの知見を得ていることも分かった。その際、先輩教師が語る過去の失敗談や工夫した試みなど体験談を聞くなかで、ただ漫然と聞き流すのではなく、先輩教師自身が自らの経験の中から教育上重要と思われるエッセンス（論点）を取り出してきている点に注目することができる教師ほど、自らの経験への振り返りにそれを役立てることができていることも半構造化インタビューから見えてきた。経験から糧となる要素を抽出していくための技を身につける上で、経験の振り返りのためのタクトは重要な教師力であり、この論点抽出と論点の関連づけの力は、個々の教育活動の場面での瞬時の判断や決断とも深く関わっている。

(3) 教育的タクトは、状況の渦中において、その後の展開を予想ないし予測することを可能にする。それにより、教師は自分が現在置かれた状況の渦中にあって、その状況に飲み込まれてしまうことなく、自己の振る舞いのもつ意味を相対化し、象徴的・役割演技的意味を見出すことにより、ある種の落ち着き、静けさ、余裕をもって行動することができる。予測的感知は教育活動の渦中においてはもちろん、短期的には翌日の教育活動の予測的イメージ化、長期的には、自らの教職熟達過程全体のイメージ化でも重要となる。とりわけ、この予測的な観点は、生徒にとって、生徒集団にとって、年間・月間・週間の教育活動全体にとって、さらに自らの教職熟達過程にとって、どのように位置づくかという眼をもつという意味で、個々の活動の準備段階、目の前の活動の渦中、さらに活動の振り返りの各段階において思いを巡らせることを可能にしており、個々の経験を構造的に把握していく上で必須の観点である。教師力養成のためには、この予測的感知を核とした経験把握の構造化に基づいたプログラムを編成することが肝要である。教師力は、知る(know)・行う(do)・在る(be)の三要素をらせん状に循環させていくなかで向上していく。個々の経験のもつ意味を汲み取りつつ（知)、

予測的感知をもって、行動の渦中において自らの行動をパフォーマンスとして相対化し（行）、その体験を自らの経験マップに編み込み、その経験マップから自らの仕事のスタイル・仕事の在り様（在）を常に座右のマップ（観点・視座）として確保していくことである。この教師力養成プログラムの遂行には、先輩、同僚教師との相互の啓発や切磋琢磨の研修体制が不可欠である。そのためには、学校日常における教育活動の振り返りや評価、教師自身のパフォーマンス分析のなかに組み込む工夫が求められる。「チーム学校」としての機能強化の一環として、教師力養成プログラムが効果的に位置づくための検証体制も含めて、本研究成果については引き続き検討していくことにしている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6 件）

鈴木晶子 (2017). インクルージョンの時代における共生・共存の智恵　－人工知能と人間社会の共生・共存を見据えて. 『教育新世界』第 65 号、P.2-13. 査読無.

鈴木晶子 (2016). ものへの思考　－　経験・感情・身体を再定義する. 『臨床心理学』第 94 巻、P.499-502.　査読無.

鈴木晶子 (2015). カントのタクト（Takt）－学習と経験に関する近代的パラダイム成立史の一コマ. 『日本カント研究』第 16 号、P.56-66. 査読無.

鈴木晶子 (2015). 子どもたちが学び育つ環境　－　教育詩学・歴史人類学から. 『子ども学』第 17 号、P.83-106. 査読無.

鈴木晶子 (2014). エスノグラフィーの手法による日独幸福感調査.『ドイツ研究』第 48 号、P.149-155.　査読無.

鈴木晶子 (2014). 教育にとっての個と普遍の間（あわい）.『教育哲学研究』第 109 号、P.14-19. 査読無.

〔学会発表〕（計　4 件）

Suzuki, Shoko (2017). Das schweigende Wissen im Zeitalter der Kuenstlichen Intelligenz. 国際会議“Das andere Wissen – The Another Knowledge. Tagung der Anthropologie. 2017 年 2 月 18 日､京都大学.

Suzuki, Shoko (2016). Inclusion as Innovation - Wisdom for Information society in 21th Century. International Forum of Multicultural Urbanism 2016, 4th November 2016, Inha University, Korea. 招待講演.

鈴木晶子 (2016). 共生・共存の智恵　－　インクルージョンの時代に. WEF 国際教育フォーラム、2016 年 6 月 12 日、京都大学時計台百周年記念館.

鈴木晶子 (2014). カントのタクト(Takt)－　学習と経験に関する近代的パラダイム成立史の一コマ. 2014 年 11 月 22 日、日本カント協会第 39 回学会、岡山大学.

〔図書〕（計　2 件）

I.C.Gill/Chr.Wulf (eds.) (2015). Hazardous Future. Disaster, Representation and the Assessment of Risk. De Gruyter; Berlin, Munich, Boston. (Suzuki, Shoko. In search of the lost oikos: Japan after the Earthquake of 11 March 2011. P.109-123).

B.Althans/F.Schmidt/Chr.Wulf(Hrsg.) (2015). Nahrung als Bildung. Interdisziplinaere Perspektiven auf einen anthropologischen Zusammenhang. (Suzuki, Shoko. Ernaehrungspaedagogik in Japan. P.128-138).

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木晶子（SUZUKI, Shoko）
京都大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：10231375

(2)研究協力者

WULF, Christoph
ドイツ・ベルリン自由大学・歴史人類学学際研究センター・教授
ZIRFAS、Joerg
ドイツ・ケルン大学・教育研究所・教授